

The Hamlet 構築の問題点

田 中 久 男

スノーパス三部作の第一作として1940年に出版された*The Hamlet*は、新聞、雑誌等に現われた書評で早くに、その構成が逸話、あるいはエピソードの連なりによっていることが指摘された¹。そしてM. Cowleyも自ら編纂した*The Portable Faulkner*に付した序文の中で、この作品が“a series of episodes resembling beads on a string”²に分散する傾向があると述べ、それを構成の弱さとして指摘した。この選集に対する書評で、R. P. Warrenは、Cowleyの考えを修正する形で、*The Hamlet*は物語よりもむしろテーマに重点を置くことを基本原則とするタイプの構成である、という考えを示した³。この考えに対して、M. Millgateは、この作品が貪欲 (greed) と愛 (love) という二つの主要なテーマを軸にしていることを認めつつも、専らテーマのみがこの小説の統一を図るものと考えていることの危険を指摘し、批判の対象とされてきたエピソード風の構成も、物語の中の主要な活動と密接な関係を持っており、この作品をまっすぐ貫いている物語の連続性 (narrative continuity) という強い要素を強調する必要があるように思われる、と述べた⁴。

このMillgateの見解は、1963年に出た彼のすぐれた著書の中で示されたもので、それ以後の批評は今日に至るまで、いくつかのヴァリエーションはあるものの、ほぼ彼の見解に沿って行なわれたと見ていい。また、この作品に強く感じられるフレンチマンズ・ベンドというコミュニティの存在、自然のイメジャリーの重要な働き、Flem=Eulaの物語を核とした、登場人物のいくつかの対照関係、伝統主義 (traditionalism) と現代主義 (modernism)、あるいは人道主義 (humanism) と自然主義 (naturalism) との対立といった、この作品の顕著な特質についても、これまでの批評が、比重の違いはあっても陰に陽に触れてきた。更に、既発表の短篇が*The Hamlet*に組み込まれた際に、どのような修正加筆がなされているかを跡づけ、そこに見られる特徴を考察する試みもJ. V. Creightonによってなされた⁵。

そこで本稿では、これまでの批評によっては焦点が合わされていないが、私には*The Hamlet*の創作過程で重要な意味を持ったと思われる“The Hound”に加えられた変更、および、この長篇小説を後続のスノーパスものの作品につなぐために作者が行った工夫、という二点を中心にしながら、これらに絡まるいくつかの問題を論じてみたい。

(I)

*The Hamlet*には、この小説の出版までに雑誌に発表した五篇の短篇、即ち、“Spotted Horses” (Scribner’s, LXXXIX [June 1931]), “The Hound” (Harper’s, CLXIII [August 1931]),

“Lizards in Jamshyd’s Courtyard” (*Saturday Evening Post*, CCIV [27 February 1932]), “Fool About a Horse” (*Scribner’s*, C [August 1936]), “Barn Burning” (*Harper’s*, CLX-XIX [June 1939]), および “Afternoon of a Cow” (*Furioso*, II [Summer 1947]⁶) の計六篇が組み込まれている。これらのうち、先ず興味を引かれるのは “The Hound” である。というのは、この短篇の中心人物で Houston 殺しの Ernest Cotton が、スノープス一族とは関係のない人物として設定されているからである。それでは作者はこの短篇を、のちにスノープスものとしてまとめるはずの作品と関係なく発想し発表したのかということ、そうではなさそうである。このことは、作者が M. Cowley に宛てた手紙の次の一節を見れば明らかであろう。

THE HAMLET was incepted as a novel. When I began it, it produced Spotted Horses, went no further. About two years later suddenly I had the HOUND, then JAMSHYD’S COURTYARD. . . .

Meanwhile my book had created Snopes and his clan, who produced stories in their saga which are to fall in a later volume: MULE IN THE YARD, BRASS, etc. This over about ten years, until one day I decided I had better start on the first volume. . . . So I wrote an induction toward the spotted horse story, which included BARN BURNING and WASH, which I discovered had no place in that book at all. Spotted horses became a longer story, picked up the HOUND (rewritten and much longer and with the character’s name changed from Cotton to Snopes) and went on with JAMSHYD’S COURTYARD.⁷

この手紙文から判断して、“The Hound” は “Spotted Horses” 等と同じく、*The Hamlet* の一部として発想されたと考えて間違いないと思われる。

しかし、上に引用した手紙は1945年8月16日付と推定されており、“The Hound” が雑誌に投稿された一番早い日付は、1930年11月7日⁸ であるから、作者が15年も過去のことを語る際に、思い込み、あと知恵、あるいは作者独特の韜晦癖が出たという可能性が全くないとは言えないかも知れない。だがこの短篇には、小説では Lump Snopes に当たる、ヴァーナーの店の店員をしている Snopes という名の人物が登場していることからしても、やはり作者はこの作品を、小説の一部として使うことを考えていたと見ていい。

ではなぜ作者は、Ernest Cotton というスノープスとは関係のない名前を、*The Hamlet* において Mink Snopes という名前に変えたのだろうか。その理由は恐らく、未完に終わった “Father Abraham” を書く主要な動機でもあり、*Sartoris* (*Flags in the Dust*) の中にも概略的に述べられていたこと、即ち、Flem を中心としたスノープス一族が、フレンチマンズ・バンドに、次にはジェファソンに、徐々にではあるが確実に根を張り勢力を拡大していくという、新興階級のすさまじい躍進ぶりを、作品に具体化していくのに見合うだけの人物とエピソードの数をそろえていく必要があった、ということだと思われる⁹。このことは、スノープス三部作の第二作の *The Town* (1957) に組み込まれた二篇の短篇、“Centaur in Brass” (*American Mercury*, XXV [February 1932]) と “Mule in the Yard” (*Scribner’s*, XCVI [August 1934]) を、“The Hound” に少し遅れて発表している事実からも推測できることである。

だが、例えば “Lizards in Jamshyd’s Courtyard” の中で、Eustace Grimm なる人物が、ス

ノープス一族と親戚関係にあるとは明確に述べられていないのに、*The Hamlet* の中では、彼の母親が Ab Snopes の末の妹ということで、その関係が明確にされ、スノープス一族の血縁としての位置が与えられている。とすれば、Ernest Cotton も Eustace と同じように、名前を変更しなくても、長篇小説の中でスノープス一族との血の結びつきを作り出すことは、作家の作業からすれば容易にできたはずである。にもかかわらず彼がそうしなかったということは、Cotton を Mink Snopes に変えることには、彼がスノープス一族の者であるという単なる表面的な血縁関係以上に、彼の物語を小説の中で形作っていく上での、大きな内的要請があったに違いない。

その要請とは、Mink を単なる脇役としてではなくて、ある意味ではスノープス三部作の進路に影響を及ぼすほどの重要な働きをする人物に仕立て上げていくことの効果、およびその必要性を、作者が感じ取ったのではないかということである。というのは、“The Hound” の Cotton の物語が修正拡大されて小説の中に収まってみると、実に意味深い効果を上げていることが分かるからである。

例えば、“The Hound” では、Houston の豚が Cotton の囲いに迷い込み、誰の所有物か不明のまま彼がその豚を冬の間中飼育していたところ、春になって Houston が所有者の名乗りを上げ、冬の間飼育料と一ポンドの囲い料を払うだけで、その豚が Houston に戻ってしまった、というのが Cotton の Houston 殺害事件の背景である。そしてこの“an overbearing” である Houston に対して、Cotton が “He taken advantage of me”¹⁰ という言葉で示しているように、いわば恨み、被害者意識を持ったことが、Houston 殺害の引き金になったように描かれている。ところが *The Hamlet* においては、Mink が Houston の牧場で一冬過ごさせた自分の子牛を、取り戻そうとして相手に拒否され、裁判にかけて三ドルの囲い料を払うことを言い渡された、というふうに状況が逆になっている。このささやかな状況の変更からだけでも、恨み、被害者意識という消極的な感情を超えた、Mink の挑戦的な片意地な態度がのぞいて見えるだろう。事実 Faulkner は、Mink が Houston を散弾銃で殺したときの彼の内面を、“What he would have liked to do would be to leave a printed placard on the breast itself: *This is what happens to the men who impound Mink Snopes's cattle, with his name signed to it*”¹¹ と表わしている。つまり作者は、この Houston 殺害を、“the vindication of his rights and the liquidation of his injuries” (p. 218) の抑え難い発露、いわば人間存在としての尊厳を守ろうとする Mink の気持の表出として捉えているのである。

ところで、こうした Houston 殺しの背景には、Cotton の場合にも暗示されているが、Mink の場合にはかなり強く出てくる、貧しい生活が自ずと醸成してくる富者への妬み、そしてこれに、貧しい生活に閉じ込められている自己への腹立たしさ、更に、そうした生活を作り出している状況あるいは運命への呪い、といったものがないまぜになった、いわく言い難い複雑な気持がある。この気持の一端は、Ratliff が間違っただけにして Mink のところにミシンを持って行ったとき、Flem への言伝として彼が与える、“From one cousin that's still scratching dirt to keep alive, to another cousin that's risen from scratching dirt to owning a herd of cattle and a hay barn” (p. 76) という言葉からだけでも感じ取れるはずである。Mink は自分と同じ境遇から一段と高い所に抜け出て行った Flem を妬ましく思い、また逆に、自分

がいつまでも同じ境遇に取り残されていることへの焦りと、やり場のない怒りをも持っているようである。また彼が自分の状況、運命を出口のない罫のように感じていることは、小説の中の“that conspiracy to frustrate and outrage his rights as a man and his feelings as a sentient creature” (p. 218) という作者の説明に窺うことができる!¹²

しかし、社会上昇のためであれば、Hoake McCarron の子を身寵った Eula と結婚することで、「老フランス人屋敷」(the Old Frenchman place) を Will Varner からもらう Flem, あるいは、殺害された Houston が50ドル持っていたという確信から、それを分け合うことを Mink に執拗に迫る Lump Snopes とも違って、Mink は潔癖性と一種歪んだ尊厳のようなものを持っている。“Only this here seems to be a different kind of Snopes like a cotton-mouth is a different kind of snake” (p. 91) と V. K. Ratliff が言っているように、Mink は、食欲なく社会上昇を目指すスノーブス一族の中の変わり種となっているのである。

The Hamlet の中で Mink をこのように性格づけ、彼をスノーブス一族の一員として設定したことは、この小説を作り上げていく上での最も重要な工夫の一つだったのではないかと思われる。というのは、鉄のような固い団結を誇って増殖しているかに見えるスノーブス一族の中にも、隠微な感情的軋轢があることを示し、更にはそうした軋轢が、何らかの形で爆発しかねない可能性を読者に予感させる働きをしているからである。この予感は、Houston 殺害の罪で裁判にかけられた Mink が、従兄弟の Flem が救いの手を伸ばしにやって来てくれるのではないかと期待しながら、“Flem Snopes! Is Flem Snopes in this room? Tell that son of a bitch——”(p. 333) と空しく叫ぶ場面に効果的に喚起されている。自分の社会上昇のためには、血のつながった殺人者と関わり合おうとしない Flem は、Mink が精神的にも物質的にも最も助けを必要とするときにさえ、それを拒絶したわけで、この Flem の態度は、Mink のように人間としての尊厳と感情にごだわらずにおれない激しやすい人物にとっては、許し難いものと映ったとしても不思議ではない。とすれば、Mink がその怒りと恨みの故に Flem に復讐しようとするのは、彼の Houston 殺害という行為から考えて十分予測できることである。それが、少なくとものちの *The Mansion* (1959) を生み出していくための重要な契機の一つとなっていると言ってもいい。

しかし、Faulkner がすでに *The Hamlet* 完成の時点で、この Mink の復讐のことを頭に描いていたかどうかということになると、断定することは難しい。というのは、1938年12月15日に Robert K. Haas が受け取ったとされる手紙の中で、作者はスノーブス三部作の構想を初めて持ち出しているが、その中ではまだ現在出版されているようなタイトルは考えておらず（それらのタイトルは、“THE PEASANTS”, “RUS IN URBE”, および “ILIUM FALLING”）、またスノーブスものを三篇 (three books) 書くつもりではいても、それらが個々に独立した巻 (three separate volumes) になるかどうかは、はっきりとはしていないからである。それに、“THE PEASANTS” と “RUS IN URBE” と題する物語について作者が説明している内容は、*The Hamlet* と *The Town* に一致するが、“ILIUM FALLING” と題する物語の内容は、*The Mansion* とはかなりはずれたものになっており、Flem が死ぬことは想定されてはいても、その死が Mink の手によってもたらされることは、少しも語られていないからである!¹³

ところが、1939年1月19日付で受け取ったとされる Bennet Cerf 宛の手紙の中で、Faulkner

は巻 (volume) という言葉を使い、第一巻のほぼ半分を書き上げたと述べている (p.109)。そして同年3月17日付で R. K. Haas が受け取ったとされる手紙の中で、作者は第一巻 “THE PEASANTS” の第一篇と第二篇 (Book 1 & 2) の手書き原稿を仕上げたこと、および、もう二篇書けば第一巻が完成することを伝えている (p.110)。同年3月25日付で Haas に宛てた手紙で、スノープスものが三巻本になる予定を述べ (p.112)、同年10月に推定されている Saxe Commins 宛の手紙で、それら三巻のタイトルを、現在出版されているのと同じもので明示している (p.115)。

このような創作状況を考えてみると、作者が1938年の暮れからほぼ一年の間に、Flem の社会上昇がどのような形で結末を迎えるのかについて、かなり明確な見取図を頭に描いてみたことは十分ありうることであり、“The Hound” を *The Hamlet* に修正拡大して組み入れていくなから、Mink をどのように Flem の物語の終局に関わらせていくのかも、恐らくかなり深くまで読み取っていたのではなかろうか。しかし、たとえ作者がそこまで読み取っていなかったにしても、*The Hamlet* の中に描き込まれた Mink の性格、行動、裁判の場面での空しい怒りと呪いの叫びは、*The Mansion* において38年の刑期を終えて Flem を射殺する、彼の動機と行動を保証するだけの重みを持っている。

〔 II 〕

Mink の物語の結末は、*The Hamlet* の構造のいわば “open-ended” 的性格、つまり作品がそれ自体としては完結していても、物語が更に発展し展開していく可能性を強く暗示する、という性格を支える大きな柱になっているが、その柱の最も大きなものは、もちろん Flem の物語である。埋め金の件で V. K. Ratliff と Odum Bookright と Henry Armstid を見事にだまし、作品の最後のページで、狂人の顔つきになった Henry が一人で堀り続けている姿を眺めながら、妻の Eula と赤ん坊を連れて、馬車でジェファソンに向う Flem の姿は、次にはその町で彼の隠微にしてすさまじい社会上昇の夢が、どのような形を取って拡大進展していくのかということについて、読者の関心をそそらずにはいない。

この “open-ended” の手法は、Faulkner 文学にあっては別に目新しいものではない。*Sanctuary* (1931) における Temple Drake のその後の人生を追った *Requiem for a Nun* (1951)、*The Sound and the Fury* (1929) の Quentin Compson が自殺する前に、ハーヴァード大学の寮友 Shreve McCannon と共に Sutpen 一族の物語を再構築する *Absalom, Absalom!* (1936)、あるいは *Flags in the Dust* (出版は1973年だが、原稿完成の日付は1927年9月29日となっている) における Horace Benbow と妹の Narcissa の性格とその後の生き方を、違った状況から照らし出した *Sanctuary*、といったふうに何度か試みられている。しかし *The Hamlet* の場合、上述の作品とは違って、創作上ある制約があった。それは *Sartoris* (1929) の中で、Flem の社会上昇の略歴がすでに書き込まれてしまっていることである。¹⁴ その略歴とは、彼がフレンチマンズ・ベンドを出てジェファソンの横丁の小さなレストランを足がかりに、血縁者を次々と町に呼び寄せ、市の発電所の監理人、市の行政の便利屋のような仕事を務め、それからサートリス銀行の副頭取に収まったというものである。このように大まかながら、Flem の経歴の見取図

を公けにしたことによって、作者は Flem を核とした物語を三巻（あるいは三篇）にまとめていく際に、第一巻の *The Hamlet* の結末を、その見取図にうまくつながるように運ぶ必要があった。しかも新興一族の首領としての Flem の貪欲性のみならず、最後には銀行の副頭取 (*The Mansion* では頭取にまで辿り着いている) に収まるだけの冷徹な狡知ぶりをも示しておく必要があった。

この創作上の要請に応える最も効果的な方法は、Flem と抜け目なさ (shrewdness) では劣らないし、それを自認している Ratliff を、まさにその抜け目な点で出し抜くエピソードを用いることだったろう。つまり、*The Hamlet* の胚子とも言うべき “Father Abraham” を書いたとき、すでに Flem の道徳的批判者、および対抗者として意図としていた Ratliff (Suratt)¹⁵ を彼が負かし、それを有力な足がかりにして、ジェファソンへの進入が可能になるような展開に、*The Hamlet* を締めくくることができた。これに叶うエピソードは、1932年に発表した “Lizards in Jamshyd’s Courtyard” で、作者はすでに用意していた。この短篇が、Flem の「村」から「町」への進出の手がかりとなるように意図されたことがはっきり分かるのは、この短篇において初めて、Suratt が半分出資しているレストランを、ジェファソンに所有しているという設定になっていることである。Suratt は「老フランス人屋敷」を Flem から購入する分担保金として、このレストランの担保権を渡すのだが、*Sartoris* で Flem が町へ進出する “foothold” となるのは “a small restaurant” (*Sartoris*, p.172) だと述べ、それを上述の短篇で Suratt 所有のレストランという設定にしたところに、作者 Faulkner の想像力の自在ぶりと確かさを見る思いがする¹⁶。そして、この短篇の主要部分が結末に組み込まれた *The Hamlet* において、本然的な人間感情の欠落した Flem と、彼の血縁者の跳梁ぶりに批判の目を向けている Ratliff が、皮肉にもその手助けをする結果になったところに、作者の醒めた現実認識が窺えると思う。

と同時に、創作上の計算という点から見れば、結末におけるこの Ratliff の敗北は、*The Hamlet* をその後続の世界につなぐという点で、実に効果的な出来事と言っている。なぜなら、その出来事は、Flem の物語の舞台を村から町に移す恰好の転換点になっているばかりでなく、“Smoke” (April 1932) に初めて登場し¹⁷ それ以後の作品、例えば *Light in August* (1932), *Intruder in the Dust* (1948), *Requiem for a Nun* (1951) 等の作品で重要な役割を演ずる Gavin Stevens を、ジェファソンの町を舞台にして思う存分使うことができるからである。また *The Hamlet* のあとに *The Town* を、更には *The Mansion* を想定していたことは、作者のスノーブス一族、とりわけ Flem への興味と執着の強さを、そして Flem の最後を見とどけようとする、彼の作家としての誠実さと執念を示しているが、そのことを、前の二作品の出版の間に17年の距離があるという事実を基に、別の観点から見れば、自己の想像力と創作力の持続を図るための、作者自身の賢明で実に個人的な戦略ではなかったか、とも思われるのである。

〔 III 〕

しかし、この *The Hamlet* の結末での Ratliff の敗北については、Irving Howe が早くに強い不満を表わした。彼はそれを、“One understands why Ratliff’s collapse is needed at the end of the book to round off Flem’s triumph; but one questions the plausibility, within

the terms of behavior set up by Faulkner himself, of Ratliff's sudden loss of intelligence and wit"¹⁸ というふう述べている。つまり Ratliff の敗北は、Flem の勝利を作品の結末で仕上げておくには必要だけれども、それでも彼が突然に知性と知恵を失うのは、作品で示された行動の条件内では納得し難い、というわけである。

この Howe の見解は鋭い指摘で、Ratliff の敗北の問題は、これまでの批評では避けられているか、必ずしも明快な答えを与えられていない。その中で Millgate が最も説得力ある解釈をしている。彼によると、Ratliff が敗北したのは、行動の性急さ (impetuosity)、彼がやろうとしている事柄 (つまり、Flem を中心としたスノーブイズムの跳梁の阻止) の本質と程度についての認識不足、および、彼もある程度の貪欲さと自信過剰に溺れてしまった、という理由によるものとしている¹⁹ Millgate がここに挙げている理由は、Ratliff のそうした態度が見て取れるエピソード、あるいは小説の枠組を観察してみれば、納得のいくものになりうると思われる。

小説の始まりの第二パラグラフにおいて、「老フランス人屋敷」の庭に南北戦争末期に埋められた金のことが、現在まで根強く村人に語り継がれていると述べられているが、このフランス人の壮大な "dream" と "pride" (p.4) の一部としての埋め金の話は、物語の現在の人物たちには追うべくもない伝説化されたロマンスとして、彼らの想像力に強く訴えかける力を持っていることは、十分考えられることである²⁰ Ratliff は「屋敷」の現在の所有者 Will Varner から、それが "the only thing I ever bought in my life I couldn't sell to nobody" (p.6) と聞かされていた。しかし、彼は "There's something there. I've always knowed it. Just like Will Varner knows there is something there. If there wasn't, he wouldn't never bought it." (p.335) と思ひ込み、それが Flem の手に渡ってから、すべてのものを金銭的に処理しようとする Flem なら、それを金のために手放すことも可能だと、恐らく "curious, shrewd, and inscrutable" (p.62) な Ratliff は考えた (speculate) のではなかろうか。そして彼は一時的にであれ、埋め金の話の真偽を実際に自分の目と手で確かめてみたいという誘惑にかられ、それがために性急になってしまったのではなかろうか。この彼の気持、態度は、埋め金捜しの現場に占い師役として、年老いた Uncle Dick を連れて来ることに現われている。あるいは、その現場で埋め金の話に疑いを抱いている Odum Bookright に向って、 "Wasn't I right here last night with Henry himself, listening to him [Flem]?" (p.338) と言い、相手が埋め金は、南部連邦発行の金に過ぎないかも知れないと疑いを出すと、 "What do you reckon that old Frenchman did with all the money he had before there was any such thing as Confederate money? Besides, a good deal of it was probably silver spoons and jewelry." (p.340) と言うが、これらの言葉からも、彼が誘惑にかられ、性急になっている様子は、読み取ることができるはずである。

小説の冒頭近くに置かれた埋め金の話は、結末における Ratliff の敗北の伏線として働いており、構造的にも小説の枠組となっている。これと同じように伏線として、Ratliff が自分の能力への過信故に敗北することを暗示しているのは、Will Varner の息子 Jody が、Ab の納屋燃やしの噂につけ込んで得ができると思っていたところ、Flem を店員として雇う羽目になり、それが結局は、 "the usurpation of an heirship" (p.88) になってしまった出来事である。フ

レンチマンズ・バンドの住人を扱うのと同じ調子で、自分の能力を過信したがために、逆に言えば、スノーブシズムの本質を甘く見たがために、敗北を招いてしまった Jody のことは、Ratliff にも言い得ることである。即ち Ratliff は、小説が始まって間もない Will との会話の中で、スノーブスを相手にできるのは二人しかおらず、その一人は Will だと言ったあと、彼からもう一人は誰かと聞かれて、“That ain't been proved yet either” (p.28) という答え方をし、暗にそのもう一人は自分だと匂わせて、余裕と自信のあるところを見せている。これと同じ言葉は、山羊の売買の件で、Flem が従兄弟の Ike Snopes の後見人だと分かって、10数ドルの金を、その白痴の Ike のためにと Mrs Littlejohn にあずけて、Will への言伝てにする言葉の中にある (p.87)。Jody ほどに Flem の本質を甘く見てはいないけれども、Ratliff の場合も、Flem への対抗者、批判者であり得るという自信と、そして油断とが、最後には彼の敗北を招く一因になっていると言っている。

Ratliff は取引きの面で Flem と同じ土俵に上っても、Flem が損得勘定だけに徹しようとするのに対して、彼はそこに非人間的なものを見てとると、損得を抜きにして人間味を優先する人物である。彼の人間味豊かな一面は、白痴の Ike が絡まった山羊の取引きの一件において見られた。同じく、*Sanctuary* で Horace Benbow が、人殺しという無実の罪で入獄した Lee Goodwin の内妻 Ruby を保護し、面倒を見てやろうとしたように、Ratliff は、Houston を殺した Mink が刑務所に入っている間、彼の妻子を自分の妹家族が住んでいる家に暫く引き取って面倒を見てやるが、このエピソードにも、彼の人間味豊かな一面は十分見て取れる。もちろん彼は、斑馬の競売で妻が夜鍋をしてためた5ドルを使って馬を買い、結局は大けがと、更にひどい赤貧の生活に屈する羽目になった Henry Armstid を、いわば自業自得であり、“I wasn't even protecting a people from Snopes” (p.321) と言って、突き放す厳しい面も持ち合わせている。が、それでも彼の本質的な部分は、人間の本然的な道徳的営みを踏みにじる悪に対して怒り、“something that dont want nothing but to walk and feel the sun and wouldn't know how to hurt no man even if it would and wouldn't want to even if it could” (p. 321)、つまり、少なくとも感情をそなえた生身の人間として、生活の場で失ってはならない最も基本的な良心と人間性を守ろうとする生き方である。このようなものを超越したところで、自分の社会上昇の夢のみを追い求める Flem に対する Ratliff の戦いは、*The Hamlet* においては、たとえ Millgate の言うように、“Ratliff's economic defeat is not accompanied by any defeat in human terms”²¹ だとしても、敗北を予め定められていたのである。

〔 IV 〕

The Hamlet の最初の章として用意されていた“Barn Burning” (*Harper's*, CLXXIX (June 1939)) は、この小説が出版されたときにははずされたが、この決定は Millgate も言っているように、“too favorable an impression of the Snopes family”²² を読者に与えないようにするためには、賢明だったと言ってよい。確かにこの短篇には、長篇小説の底流となっている富者と貧者との葛藤、あるいは歪んだ非道徳的欲望と道義との葛藤というパターンに通ずるものがあり、親への愛と良心のはざまに立たされている Colonel Sartoris Snopes 少年は、そうした

愛とか良心の問題を超越している兄の Flem の姿を照らし出す上では、それなりの効果を生み出すことができるかも知れない。しかし、Flem のそうした姿は、Ratliff との関わりを中心に徐々に明らかにしていく方が、この作品において、Flem と Ratliff の対立構造を中心軸にしていることを鮮明にする上でも効果的だと思われる。それに、少年の重苦しい悲劇的な調子の物語は、最初の篇で用いられているゆったりとした語りの調子とは合わなくなる恐れがある。少年の道徳的・良心的姿勢は、Ratliff が十分引き継いでいるし、彼が示しているスノーブス一族内の「変わり種的存在」は、Mink によってもっと激しい形で具現化されている。

Colonel 少年が *The Hamlet* に登場しないことで失なわれるものは、Ratliff と Mink の二人の存在によって補なわれており、この小説の中で焦点を少年の悲劇から Ab の放火癖に移し、それを Ratliff の語りの中に組み込んだことは、作品の枠組の点から言ってもよかった。なぜなら、この Ab の放火癖は、Flem が店員としてフレンチマンズ・ベンドに定着する足がかりを作ったのであり、Flem が作品の始まりからほどなくして登場し、そうして結末でジェファソンに向けて去って行くという、実に見事な劇的な構成になっているからである。この彼の登場と退場という枠組は、Eula と若者たち、彼女と Labove, Ike と雌牛、Houston と Mink と Armstid の各夫婦、といったそれぞれの関係において見られる、人間の基本感情としての愛(あるいは肉欲)の物語を、すっぱり包み封じ込む形になっていて、その感情の片鱗すら見せない Flem の姿を、象徴的に示しているように思えるのである。

註

1. 例えば、Frederick W. Dupee は *New York Sun* 紙 (2 April 1940) に寄せた書評の中で、"primarily it is a tale—or rather a string of anecdotes—about money, greed and rapacity as typified by a family named Snopes" (John Bassett, ed., *William Faulkner: The Critical Heritage* [London and Boston: Routledge & Kegan Paul, 1975], p.251) と述べている。
2. Malcolm Cowley, ed., *The Portable Faulkner*, Revised and Expanded Edition (New York: The Viking Press, 1966), p. xxv. この版は初版 (1946年) に、"The Court-house" と "The Jail" の二篇の物語、および「序文」への「あとがき」("Afterword") が加えられたもので、本稿に引用した句は元の版にあるもの。
3. Robert Penn Warren, "William Faulkner," in *William Faulkner: Three Decades of Criticism*, ed. Frederick J. Hoffman and Olga W. Vickery (Michigan State University Press, 1960), p.123.
4. Michael Millgate, *The Achievement of William Faulkner* (New York: Vintage Books, 1963), pp.186-87.
5. Joanne V. Creighton, *William Faulkner's Craft of Revision: The Snopes Trilogy, "The Unvanquished," and "Go Down, Moses"* (Detroit: Wayne State University Press, 1977), pp.26-48. 大橋健三郎氏も『フォークナー研究2——「物語」の解体と構築』(南

雲堂, 1979) の『村』論 (pp.325-77) の中で、諸短篇と小説との関係について深く考察されている。

6. James B. Meriwetherによると、この“Afternoon of a Cow”は、1937年6月に作者が、彼の作品の仏語訳者 Maurice E. Coindreau にそのタイプ原稿を与えているので、*The Hamlet* の出版前には雑誌に発表されなかったが、この短篇のエピソードが小説の中に生かされた、と考えていいだろう (*The Literary Career of William Faulkner: A Bibliographical Study* [Columbia, South Carolina: University of South Carolina Press, 1971], p.43)。しかし J. V. Creighton は、この短篇の中心人物 William Faulkner なる人物が、小説の Ike とは決定的に違うとして、論の対象からはずしている (*Faulkner's Craft of Revision* の巻末注19を参照 [p.163])。
7. Malcolm Cowley, *The Faulkner-Cowley File: Letters and Memories 1944-1962* (New York: The Viking Press, 1966), pp.25-26. “The Hound”が“Spotted Horses”あるいは“Barn Burning”同様、長篇小説の一部として発想されたことについては、同書p.31を参照。
8. Meriwether, *The Literary Career of William Faulkner*, p.173.
9. *The Hamlet* より前に発表された作品には、Flem のほかに、Byron (*Sartoris*), Clarence と Virgil (*Sanctuary*), Ad と Eck と I. O. (“Spotted Horses”), Ab (*The Unvanquished*), Colonel Sartoris (“Barn Burning”) 等、かなりの数のスノーブスたちが現われている。
10. Joseph Blotner, ed., *Uncollected Stories of William Faulkner* (New York: Random House, 1979), p.157.
11. William Faulkner, *The Hamlet*, Third Edition (New York: Random House, 1964), p.218. 以下、本稿でのこの作品からの引用はすべてこの版により、カッコ内にそのページ数を示す。
12. “there was reserved one virgin, at least for him to marry” (p.237) と思っていたのに、彼がある森林伐採地の飯場の娼婦と結婚することになってしまったという皮肉な巡り合わせも、自己の閉ざされた生活、運命への言葉にならないうっ屈した感情を生む一因になっていると思われる。そして、“The Hound”では独身だった Cotton を、このように小説の中では結婚して二人の子持ちの男にしたことは、本論では触れる暇はないが、重要な変更の一つである。というのは、Mink 夫婦の結びつきと生活は、Houston と Armstid のそれと互いに照射し合い、同時にそれらが、Ike Snopes と雌牛の愛の交歓が作り出す幻想的で詩的な世界に照らし出されて、人間の暗い業と宿命を感じさせずにはおかないからである。更に、これらの夫婦関係が、結婚をどこまでも冷徹に損得の立場から、まるで商いの一部であるかのように考えることのできる Flem と Eula という似ても似つかぬ二人の、喜劇的でもあり、ある意味では悲劇的でもある結びつきを、強く映し出す働きをしているからでもある。
13. Joseph Blotner, ed., *Selected Letters of William Faulkner* (New York: Random House, 1977), pp.107-8. 以下この書簡集についての言及は、本稿の中でカッコ内にそのページ数を示す。

14. William Faulkner, *Sartoris* (New York: Random House, 1956), pp.172. *Flags in the Dust* (New York: Random House, 1973) では, p.154. ちなみにスノーブス一族の増殖ぶりのことは, *Sanctuary* (New York: Random House, 1958), p.171でも, Horaceが簡単に思い出として触れている。
15. 拙論「The Hamletの胚胎——Flem SnopesとV. K. Surattを中心に」(『ウィリアム・フォークナー——資料・研究・批評』2巻1号〔南雲堂〕)を参照。
16. 作者の想像力の自在ぶりについては, 先に触れたCottonからMinkへの変更のほか, “Afternoon of a Cow”のWilliam Faulknerを, 小説では白痴のIke Snopeに変えて, 彼と雌牛との物語を, この小説の「愛」のテーマを支える重要なエピソードに作り上げたこと, あるいは, “Fool About a Horse”の語り手の少年を小説ではV. K. Ratliffに, 語り手の父親をFlemの父のAb Snopesに変えたところにも顕著に窺える。AbがFlemの父になっていることは実に重要である。というのは, 小説でスノーブス一族の数を増し, その一族の系図に明確な柱を与えたということのほか, “the entire honor and pride of the science and pastime of horse-trading in Yoknapatawpha County” (p.34)という古い価値観の世界で, 馬の取引をやろうとするAbと, 既成の慣習にこだわらず, 人間関係を含んだすべてを損得勘定に還元して, ひたすら社会上昇を図るFlemとの間の距離を浮彫りにする働きをしているからである。こうした親子の人生コードの違いは, 作品の底流となっている時代の移り変わりを暗示し, Flemを中心とした新興階級の台頭を不気味に伝えている。FlemがVarnerの店に勤めるようになって以後, Abが言及されるだけで姿を消してしまうのも, このことと無関係ではない。
17. “Smoke”が発表されたのは*Harper's*, CLXIV (April 1932)で, *Light in August*は1932年10月にHarrison Smith & Robert Haas社から出版されている。“Smoke”の完成は「フォークナー短篇送付一覧表」によると, 1930年2月以前であり(Meriwether, *The Literary Career of William Faulkner*, p.175), *Light in August*の手書き原稿の最終ページには, 1932年2月19日付の日付が入っているから, これを原稿仕上げの日付と考えていいだろう (*Ibid.*, p.67)。
18. Irving Howe, *William Faulkner: A Critical Study*, Second Edition, Revised and Expanded (New York: Vintage Books, 1951), p.250.
19. Millgate, *The Achievement of William Faulkner*, p.199. Cleanth Brooksは, Ratliffは名誉のためとか, Ikeのような人間のために私欲を捨てて行動している場合は, スノーブス一族にうまく対抗できるが, 簡単に金が入りそうだと思ったら, 注意力を失ない, それでだまされてしまったのだと説明している (*William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* (New Haven and London: Yale University Press, 1963), p.188)。
20. Cf. James Gray Watson, *The Snopes Dilemma: Faulkner's Trilogy* (Coral Gables, Florida: University of Miami Press, 1968), pp.70-71. ここでGrayは, Ratliffの敗北に異を唱えたこれまでの批評では, 「老フランス人屋敷」が村人の想像力に与える影響力のことが, 十分考慮に入れられていないと述べている。
21. Millgate, *The Achievement of William Faulkner*, p.199.

Abstract

Some Problems in the Composition of *The Hamlet*

Hisao Tanaka

Incorporating "The Hound" (1931) into *The Hamlet* (1940), William Faulkner changed Earnest Cotton, a protagonist of the short story, into Mink Snopes. This change, far from a mere change in name, led the author to create "a different kind of Snopes," a type of man who, though abjectly poor, cannot forget "his rights as a man and his feelings as a sentient creature." Such a characterization of Mink serves to throw into relief the immorality and greed for gain of Flem Snopes, his cousin, who deserts Mink when he is being tried for the murder of Jack Houston. Furthermore, this characterization suggests the possibility that Mink, in the distant future, will visit revenge upon the status-seeking Flem. This suggestion helps to give the novel what is called an open-ended quality, which Faulkner has used in such works as *Sartoris* (*Flags in the Dust*) or *Sanctuary*.

The open-ended quality is what Faulkner intended for *The Hamlet*. Because he already gave in *Sartoris* a very brief outline of Flem's career since his appearance "behind the counter of a small restaurant" in Jefferson, it was necessary for the author to create an episode to bridge the period between Flem's departure from the hamlet and his appearance in the town. This bridge emphasizes Flem's outrageous shrewdness as he outwits Ratliff, who considers himself shrewder than Flem. Faulkner had prepared the situation in "Lizards in Jamshyd's Courtyard" (1932), a short story in which Suratt (Ratliff in the novel) gives Flem "a lien on his half of the restaurant" as his share of the money to buy the Old Frenchman place.

Irving Howe's question about the plausibility of Ratliff's collapse at the end of the novel might be answered if we examine the instances in which his humanity gets the better of his sharpness in trading, and take into account the influence of the "stubborn tale" of the buried money upon his "curious, shrewd," and speculative nature. The tale told in the second paragraph of the novel, foreshadows the final episode of the buried money. The "usurpation of an heirship"—from which Jody Varner suffers because of his underestimation of Flem's shrewdness—likewise foreshadows Ratliff's final collapse, brought on for much the same reason. These two foreshadowings, connected with Flem's appearance in, and departure from, Frenchman's Bend, help to give the novel a dramatic framework, one which, structurally, seems to wall up the natural expressions

The Hamlet 構築の問題点

of human feelings shown by such characters as Labove, Ike Snopes, Houston, or Mink, and symbolize Flem's style of living.